
焼きたて工房

ピクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焼きたて工房

【Zコード】

Z6376C

【作者名】

ピクト

【あらすじ】

主人公あかりは最愛の親友が異母姉妹だったことを知る。これらも異母姉妹の光と仲良くしようと思っていたが、光にはその気なし。それどころか、あかりを嫌うようになった。あかりは光と仲良くしたい。その気持ちは、17歳になつても変わらなかつた。

初めて知ったこと

私は6歳まで光のことをただの友達だと思っていました。

母から聞かされた真実は、7歳を迎える私にとって、とても衝撃的なものだったのです。

ハッピーバースデーあかり！

そう書かれた細長い紙は天井に張られていました。

「お母さん…これ…」「おめでとう…」

今日で 7歳ね…

なく、普通の一般市民の家。

誕生日を祝つてもうれるのは普通のことでした。

「誕生日プレゼントの前に言わなければいけない」とあるのよ。」「あかりにはね。妹がいるの。」

何のことが全くわかりませんでした。「あかりのお父さん、もう、死んじゃって、いないわよね。

」

私の父は私が生まれて4年後、病氣で死んでしまったのです。

「お父さんはね。

お母さんじゃない、ちがう女人とずっと前に結婚して、子供もいたの。

でもお母さんと知り合って、お母さんのことも愛してくれたのよ。

「 その時の私は、それがどういふことかわかりませんでした。
(今考えれば、それは父が母と浮氣していたことになる。)

「 その子供があかりの妹なの。 でもあかりと同じ7歳だからね。 」「 ふーん。 」

7歳児にこんな難しい説明はありかど今は思います。
「 光ちゃんつていう のよ。 」

「 …え…。 」

ている
小学校の大の仲良しだったのです。

光は私が通つ

次の日。 私は学校に行きました。

光は、昨日、私と同じように、親から、私と同じことを聞いた
よかったです。

パン!

私は頬を叩かれました。

「 …光ちゃん…? 」

「 知ってるんでしょ。 」

「 え? 」

確かに私に妹がいるということは母から聞かされたけれど、頬を叩かれることとは、身に覚えがありません。

初めて知ったこと（後書き）

この物語は私の友達の話をアレンジしたものです。私はその友達のことが大好きです。この気持ちを読者の方たちにもわかつてもらえたうれしいですね。

あんたなんか大嫌い！

「なんで？」

モヤモヤした空氣の中。私はわけがわからずただただ立っていました。

「ウザイよ！」

…。今の世の中正直いってす「」こと思つ…。

7歳児が『ウザイ』を口にするとは…。

光はそのころの私よりはるかに大人…だつたです。

「あんたなんか大嫌い！」

そのまま光は去つていった…。

「…？」

私はわけもわからず家に帰りました。

明日も光と仲良く遊べると信じて…。

次の日のことでした。

私はいつもどおり元気に登校しました。

「あーあ。つまんないな。毎日一人で学校に行くの。」

私の家は学校より少し離れているため、一緒に登校する人がいなかったのです。

「…光と…学校行きたいな…。」

始業ベル10分前。

ガラッ…

ザワザワ…

教室内はまだ先生が来ていないのをいいことに、ザワザワしていました。

「光…。おはよー…。」

その瞬間、光は私のことをにらんできました。

「あれ？仲良くしないって言わなかつたつけ？」

ほんつつつつつつつつつつつつつつつとうに怖い顔。

7歳の私は、まだ『怖い』という漢字を知らなかつた。でも無意識的に頭の中で使っていました。

'ם'ב'ג'ה'ג'ג'ג'ג'ג'

あ・ん・た・な・ん・か・大・嫌・い！！」

私は逃げ出した。

悲しかつた訳じゃない。悔しかつた訳じゃない。
ただ、あふれてくる塩水を。涙という雲を。

ただ……それだけだつた……。

今時の若いもん

そのうち私は17歳、高校生になりました。

光とは家が近かつたせいか、中学も一緒に涙をこらえることがとてもつらくて……。

小学生のころと比べてかなり変わったと思います。
光は私のことを『あんた』ではなく、『あかり』とよんでくれるようになったのです。

それでも私と仲良くなろうとこう気持ちはならないようだ……。

そんなことを考えつつ、全速力で走っているのは、遅刻しそうだから。

私は普通の高校生ではありません。

『パン専門学校』つてもんに通っているわけだ。

パン専門学校つてふつーにないよね。それが最近できたところです。
普通に道路を歩いていても全然わからぬ場所にあるんです。

……私、……高校生になつてかなり口悪くなつたかもです。

……いいよね……“今時の若いもん”になつたんだし。

ガラツ…

「すいません。成田先生！遅れました！」

「見ての通り一時限目は始まっている。」

教室にいる生徒全員…あつ、全員じゃないな。何人かが忘れているが、ノートが机の上に置かれている。

「ええ。だから遅れましたって言つたじゃないですか。あ。もしかして聞いてなかつたんですか？」

沈黙…。

「遅れてきたといつのにせんの態度はなんだ――――（怒）」

「ブツ…。」

私は氣づかれぬよつ、小さく笑いました。

「つたぐ…。今時の若いもんは…。」

“今時の若いもん”つてそんなにいけないものですか。

「立つてろ。」

“今時の若いもん”つていうか、“廊下に立たされる”つてすうじこ古いんじや…？

「ふあ～い。
ん～～？」

「ハイ！」

「ひじて私は廊下に立たされました。

今時の若いひと（後書き）

今回のお話は以前のお話ですよつ面白くでしたつもりです。でもたいして面白へありません（泣）

遅刻した……！

「私は運が悪いです。

廊下には立たされた私はある人物を見つめていました。

「あかり……。」

「ひ……光……。なんで……。」

光がニヤリと笑ったような。

「私、今日からこの学校に通うの。ようじく。」

「な、っ……。」

「なにい……！？」

ガラッ……

「「ひむせこぞー！ 横原！ あ……。ちょうど良かつた。横原、入ってくれ。」
まきはら

「はあー！ー！」

「馬鹿ー！お前じゃないー！」

パタン。

何も『馬鹿』って漢字で言わなくたって。

しかし、私にとつて、光がこの学校に来たことが、大ニュースならぬ大姉妹問題となりそうな気がしていたのです。

「はじめまして。槙原 光です。よろしくお願いします。」

ザワザワ…

「前はどこの学校にいたんですか?！」

「えっと…。東京練馬区東高校です…。」

「すると…ちがう県からやつてきたわけだ…！」

教室内の声が全て聞こえてくる。

つーかここ東京です。

「じづかにい！授業の続きだ！。質問は後にしろ…。」

あれから何時間たつたのか。

私は廊下に死んだように眠っていたらしいです。

「昨日2時（深夜）に寝たからなあ……。それにしても成田のやつ、『そんなに寝たかったら廊下で放課後まで寝てろー』ってどーいう意味よ。」

私は帰りの道を歩いていました。

「あかりいい〜。」

振り返ると親友の伊藤
いとう 優花が。

「優花……。」

「はい、これ！」

優花に手渡されたものはノート。

「今日やーっと廊下だつたでしょ。」

「優花、最高。」

「あはは。」

「とこりでさー。今日転校してきた“光ちゃん”？なんかさー、男子にモテモテらしきよ。彼氏が光ちゃんのとこ行っちゃつたつ

て「もいたし。なんかウザくない?」

「あ~。やつぱり。」

「やつぱりって…。あかり光ちゃんの」と短つてんの?」

「あたしの妹だもん。」

「うひそーーーーん! なんで今まで教えてくんなかつたのー?...じ
やー双子?...だよね!」

「うひそ。異母姉妹だから。」

「フクザツ!」

「わかつてんなら言いつなー!」

そして私たちは別れた。

光の目的

「はあ～～…。」

何か目的があつてきたのかなあ。
目的があるとしたらあたししかないよね～…。

私は早くも光のことで頭がいっぱいでした。

あたしがパン専門学校に入学したのは光と子供の時に食べたパンが
すごいおいしかったからで…。

光はなんでこの学校に転校してきたんだる。

あたしと同じ気持ちできた…？…いや、そんなことはないハズ。光
はあたしを嫌つてるんだ。わざわざ同じ学校にくるものか…。

私はぐるぐる考えたけれど、答えは見つかりませんでした。

「光と仲良くしたい…。」

願いよ、届け！

し
し
し
ん
。

「無理かなあ……。」

「あかり。」

肩を『ポン』とたたかれました。

「つわああああシシ...」

光でした。

「そんな驚くことないでしょー。オバケじゃないのよ?私は。」

うーーー。思いきり聞いてみよーー。

「あ……あ……あのね。」の学校に向のためにきたの?」

「向ひて。そりゃおパンくつ屋ここに来たんだね?」

「うともですね。

「うーんと、じや、向の町で~つーか向の獨いど~」

「独い……?」

「うさ。」

「囁ひてここね。」

「いや、聞くたぬこせまつしますからー。」

「うさ。」

「あなたをいじめるためにもた。」

えええええッ!

「なーんぢやって。」

ウソかよ。

いやー、ウソじやなかつたら困るからー、つか怖いからー、

……私最近ノリ突つ込み多ッ……いです。

どんだか~~~~~つって……?
じゃ、いかほど~~~~つで。

「じゃ、ただパンづくつ顔こなれたの?..」

「うそ。」

ホントなのかな…。

ため息

「あー。疲れた」

「ただいま、ニヤモ。」

「ニヤオウ。」

ニヤモとは私が飼っている猫です。

ドサツ

ベッドに横たわる。

こんなヒマな日、彼氏でもいればなあ……。
なんせ、告白されたこともないし。

あ。

告白されたことはありました。小学校6年の時。私は、光の好きな人に告白されたのです。

「それも嫌われてる理由のひとつなんだよな～」

「あ～もうやだッ！」

「こんな生活ー！」

一人暮らしなんてさみしそぎるし…。

「ルームメイトでもいればなあ…」

「ニヤウアウ…」

「あー…『メン…ニヤモの』こと忘れてた…。」

にしても寂しいことにはかわりなし。

これじゃ一生ペットが恋人の寂しい人生送っちゃうじやん…！

恋人…。

恋…。

考えれば、あたし恋したこと…ない。

いつも近くに光がいたから光のことばっかりで…。

「はあ…」

なーんか今日、ため息ばっかり…。

ルームメイト…

ルー……。

「そつかあ！ルームメイト募集すればいいのかあ！…」

あれえ？そーいえば…

大家

『なあ、この部屋は一人暮らし用です。誰かと一緒に住むことはできません。』

「やつぱし無理か…。」

寂しい…寂しそうだ…。

「ニニヤー、」

「ヤモ…。

「にやあにやあ。」

「ニヤウアウ。」

「ひめおーん。」
「いわいわー。」

なぜか猫語で話す私。

寂しいよ〜。。。。

「あ(、>..)〜」

いじめ開始

「光。あたしのこと、嫌つてるんじゃないの？」

「はあ？ なんでわたしがあかりのこと嫌わなきゃなんないの？」

「…じゃ、仲良くしてくれるので…？」

「あたりまえじゃん。わたしはあかりのこと、大好きだよ。」

やツツツたあああ！！！

嬉しい！光が、あたしと仲良くしてくれるので…

そんなことで頭がいつぱいでした。普通なら、なぜいきなり、と、考えるものなんんですけど。

そして光は、私の性格を私以上に理解していました。

私はたぶん、安心すると、相手を信用しきって、たとえいじめられたり、騙されても、相手を裏切ることのできない、そして、それが続いても、自分の中にしまい込んでしまう。簡単に言つと、潔白、誠実、天然、アホなのです。

だから、光はあんな行動に出たのでしょうか。

「あかり。一緒に帰るー。」
「いいよ。」

その時の私は光を信用しきっていました。

「よじたいところがあるんだけど……いい？」
「うん。いいよ。置い物とか？」
「ん…。まあ、そんなとこ。」

疑わなかつた。

「ちゅ…ちゅっと、ビル内で行くのー…？」
「もうちょっととー…。」

光はどうぞんしづみの中へ…。

つか、ここにこんなとこあったの?
ぼろつちことかではないけど…どう見たって空き家とわかる建物が
見えてきた。

光はその中へ入っていく。

「どうしたの？早く来なよ。」

「え、あたしも行くの？？」

「あたりまえでしょ。ほり、早く～。」

私は光に腕をつかまれ、空き家の中に、投げ飛ばされました。

ダーン！

「こいつ……たあ……。」

ギィ…

この床はきしむ。

「な……何……？」

「わたし達、友達よね。」

「え！？」うそ……。

「友達なら、お願ひ、聞いてくれるよ。」

「え！？」

よく聞き取れなかつた。床にたたきつけられて、背中が凄く痛かつたし。

ギイ
ギイ

「！？」

なんか、ヤクザっぽい人たちが入ってきた。

「あかりはあ～いじめられても許してくれるよね～～～。」
「な……!?」

ガタガタツツツ

私は眠らされた。

眠気がヤクザに殺された

ハアハア

۱۷۰

あたしの結婚！？

「待つて…。あたし確かに空き家にいたハズ。」

記憶がゴツチャゴチャで。

うんと

空き家に連れて行かれて、ヤクザに毆打されて、て、て……?

お母さんなら何か知ってる?

とたとたとた

「お母ちゃん～～～。」

「あ～、あかり。起きたの。」

あら、あかりって、振り向かずに言つなよ。

「あたし…。自分で帰ってきたの？」

「ううん。あんたの友達が、運んできてくれたのよ。」

「友達…！？」

「カワイイ子だったなあ。2つ結びの茶髪の女の子。」

光じやん。

何考えてるんだろ…。

「あ～～、もうシッツ！」

考へても仕方ない！ない頭であれこれ考えるな！！
全く…。

次の日―――

「おっはよーあかり。」

「え…？」

結局昨日は眠れずじまいだったなあ。
何も考へてないのに眠れないんだもん。

そんなんですつ”」に眠かった。

「光～～～。」

「どうしたの？ 眠いの？」

「……うん。」

「寝てもいいんだよ。あ。なんなら寝させてあげよつか？」

「は……！？」

「今日も“あの場所”！」いつよーーー！」

なに言つてんの？

ガラッッシ…

眠氣も吹つ飛んだ。

“あのヤクザ”だ！あの時のヤクザたちだ！
何されるんだる…。

“なんなら寝わせてあげようか？”…
まさか…まさか…！

「あかり。行かないの？行きたくないの？」

そりや“逝き”たくないですッツツ！

「オラ！邪魔だ！だけ！！」

「……」

ヤクザたちがこいつらに向かって「うううう……」

ヤクザたちが光の後ろにならぶ。

「あかり。行く?」

「……行く行く! あつたりまえじゃ~ん……」

即答。

ああ、もう。煮るなり焼くなり勝手にしや。

「じゃ、放課後ね!~!」

ああ。あたしどうなるんだ。

母の返答

しかし結局、放課後のアレはバスになつた。
何があつたかは知らないけれど。

「『めんね～～！』友達が風邪ひいちゃつてさあ～～。。。」
その“友達”というのはあのヤクザのことなのか。

「ううん。全然いいよー。」

全然良かつたよー。ホッとしたよー。…これが本音。

「また誘つからー。」
… ギヤー――――ス！

誘わないでーー！

そんな会話をキニ一日が終わつた。

「…お母さん。」

「なあー。」

「前にひ。あたしを運んできてくれた友達、いたでしょ。」

「あー。あの子ねえ。」母は懐かしいといったような顔をする。た
つた三日前のことなのに。

「なあに?ケンカでもしたの?」

私は首を横に振つた。

「あの子は…光なの。」

母は一瞬目を見開いて驚いた様子を見せたが、ふつ、と笑って、「やうだつたの。」と、聞き流した。

私はカ〜〜〜ツツときた。

「なんでそんなに普通にしてござれるのー? あれは光なんだよー! ? どうして…。」

「あかり。」

母は今度はこっちを向いて話始めた。

「あかり。母さんは光ちゃんのことに何も言えないの。」

「あたしが光にいじめられてるつていつても?」

そしてまた『えつ?』という顔をする。

だけどまた…

「ええ。何も言えないわ。」

どうして…。

そんな私の気持ちを悟つてか、

「あのね。母さんは、父さんの愛人だったわけ。正式な夫婦じゃなかつたし、光ちゃんのお母さんは父さんの本妻だったから、母さんは光ちゃんには何も言えないの。」

私は泣きわうになつた。

「お母さんはどうしてあたしの存在はそんなもんなんだー!?」

悲しかつた。

お母さんは、お母さんこま、わかつてほしかつた…。

アレンジパン制作コンテスト

冬がやつて來た。

雪。地面に落ちてはスー^チと消える。

なんだか、…寂しい。

あの日以来、母との会話は切れ、田も呑ませてくれない。無理矢理話をしようとするば、

「じゃあ、なんて言えばいいの…？」さつきからあれこれ言つてくるけど、それじゃ、なんて言えばあかりは納得する！？自分ばかり辛い思いをしてるなんて思つんぢゃないの…。」

……ギャクギー。

「はあ…。」

「されでは、名皿ちゃんとプリントを見ておくよつ。」

ハツ。もう授業終わつたんだ。『ケーキミックス適合パンの作り方？…やつべ。聞いてなかつたし。まあ、後で優花に聞いておきますか。

ところでプリントには、『アレンジパン制作コンテスト』と、書いてあつた。

数日後。

「あかつおめでとう。」

「おめでとう。」

「おめでとう。」

おめでとう、おめでとうと言われたからって、

「あつがとう。」

とは言えない。

それが身に覚えるなことなら、尙更だ。

「あの…何の」と。

「んむ～…とほけやつて～～（笑）」

私は優花に背中をバンバン叩かれ、漫画の姫が飛び出でたくなつた。

「…とほけでないんだけど。」

「え～シッ！～この前先生からプリントもひつて説明うけたじゅーん。…あ。もしかして、寝てた？」

うーん…。どうだろ。

私は記憶をわかのぼってみたが、どこまで行つても、見つからなかつた。ていうことは、寝てたか、考え方。まいづか。

「あかり？あーい。あかり？ダメだ。ついに逝りちやつたか。逝？

「もー。向の！」とよう。もつたいくらいに早くこいつ…。」

わざとぶつつ「」してみた。

「キーモーイー！あかりが、アレンジパン制作コンテストの出場者に選ばれたってこと！名誉なことだよお！何せ、学校から3人しか出ないんだから。」

「…へえ。」

「へえって…。嬉しくないの！？コンテストで優勝したら、ガッコの顔だよお！んーと、あとこの2人は三年の川柳先輩と、あの光ちゃんだよ。緊張感ないのかよ。：あ！わかった！妹とバトルだから、血脳肉踊るつてやつツスかあ！？」

「！？」

ひ…光も出るの！？

そのとき私は底知れぬ不安を感じたのです。

「つかせこ実況（前書き）

今回のはあまりストーリー性というか、大きな変わりがありません。
おもしろくないかもしませんが、その通り、『了承下さい。

「つるさい」実況

大会当日 - -

「さーあ！はじめましたあ！アレンジパン制作コンテストお！解説はあのかの有名なパン職人田中太郎さん！よろしくお願ひしますねえ！」

そして実況はわたくし「ヤクアガリで」「ぞこます！…会場」「出席の審査員の皆様よろしくお願ひいたしますですはい！」

会場に来ていた審査員も、出場者も、田中太郎さんも思つたことだろ？『実況つるさい』と。

しかも「ヤクアガリとかどんだけ」な名前なんですか。ていうか、田中太郎って名前もある意味どんだけ」な名前だけどね。そんなジヨーダンはおいといて、

いよいよ始まつた。

説明を聞いてなかつたから、わからなかつたけど、この大会はトーナメント戦で、誰と当たるか、わからない。勝ち進むと、同じ学校の2人が当たることもある。

そんな大会だつた。

川柳先輩は第一回戦で敗退。私と光は決勝まで進み、当たつてしまつた。（準々決勝ぐらいまで進めたらあとはてえぬいて、落ちていこうと思つたのに…。）

あくまで“アレンジパン”制作コンテストなので、普通のパンではダメだった。

「さあ……コンテストはいよいよ終盤に……

決勝戦とこうとこ今まできましたが、今回の対戦は同じ学校からきている2人なのだそうです……このようなことに関して、どう思われますか？田中太郎さん。」

「そうですねえ。やはり、おたがいやりにいくのではないでしきうか。

それに……

「さーあーももなく始まります……どのようなパンを作つていただけるのでしょうか！楽しみですね……」

「……そうですね。」

決勝戦開始（前書き）

遅くなりましてすいません。

決勝戦開始

張り詰めた空氣の中、あかりは冷や汗をかいている。

しかし、一方の光は余裕の笑み。

微妙にコワイ。

あと5分で決勝が始まる。

じじょじょじょすればいいのか。。。

私が負けるべき?いや、実力で勝てるとか自信はないけど。

ビー。

では、これから、第24回アレンジパン制作コンテスト決勝戦を行います。
選手の方は…

アナウンスが流れる。

やつば…。始まつた。

ビーしょー。

私がオロオロしていると、

「 横原あかりさん。始まりますよ~。ステージへでてください~。」

「はつ…はい！」

とつあえずステージへ出る。

神様仏様！私をお助け下さい…！

無宗教なんだけど。

パンのイメージも思いつかない。

負け決定かな…（泣）

なんて自問自答していると、

カーン！

あやあやあや…。
始まつた！

とにかく、パン生地を作ろう。

薄力粉？卵？……。あ…あれ？強力粉？

もういいや！混ぜ合わせてやる！

強力粉です。

ガチャガチャ…

あ……あれ？

なんかヤバい形になつてますけど。

ちつ！まあいいや。まだ時間あるんだから。

光は…？
チラ

それは見なくてはわからない、エベレストなみのパンだった。

何あれ！？
スゴッ！

！？

盛り付けも完璧で、誰が見ても綺麗だった。

ナチュラルに苺やラズベリー、など、マジでベリースペシャルと呼ぶのにふさわしかった。

そんな光のに比べれば、私のなんか富士山にもおとばないくらいだ。

「もーいいー作り直しー。」

せつまつて、生地を「コネコネ」といふと、あらものが出来てしまった。

それは野菜。

あかりの頭の中に次々とイメージが！

見えた！

私はできる！
私はできる！

あかりは燃えていた。

もうすぐ時間が迫っている……。

私が考えたのは…

ザ・人参& 薩摩芋の野菜でヘルシー！健康を考えたおいしいパン

です。

めちゃくちゃ長い。

私に名前のセンスは全くない！

いや、なくていいのだ。重要なのは中身なんだから…。

第一に…わたしが目をつけたのが、人参と、薩摩芋の野菜であって、甘いという点。

だから、すり潰して、パン生地に練り込み、まわりに人参から出た汁に砂糖を少々加えたものを流し込み、その上に薩摩芋をふかしたものを作り、パラパラとかける…。

見た目どんな感じかは、「想像にお任せします。

しかし…。これで、本当に光のパンに勝てるのだろうか？

見た目で言えば、光のパンの方が美味しいそうだ。

ぐるぐる考へていると、

ピーッ！

試合終了！

「審査員の方々は選手作のパンの方へどうぞー！」

ゾロゾロと審査員が一いつ列れいへくる。

あかりか？光か？

審査員たちは、2つのパンをまじまじ観察。

「このパンは何を使って作ったんですか？」

「え？あー…えっと、人参と薩摩芋を使いました。あと、少し薄力粉を混ぜたんですけど…。」

そんな時間は早く過ぎた。

結果

5人の審査員のうち、

あかり… 3人

光… 2人

「あかりさんの勝ち!」

ワーッツ！

パチパチパチパチパチパチパチパチ！

え
…？

「なお、優勝賞金として、1000万円を差し上げます！？」

1000万円！？

あかりが目を丸くしていたとき、光は…あかりを睨んでいた。

見た目

光
あかり
⋮

味

光
あかり
⋮

創意工夫

光
あかり
⋮

総合

光
あかり
⋮

“優勝者
あかり

だった。

その結果に光は納得がいかなかつた。

“見た目は私の方が綺麗なのに……もちろん味だって私の方が美味しいはず。自分で味見したし。

創意工夫なんて、人参と薩摩芋がなんだつていうの？
私は水から果物の産地まで考えて作つたのに……”

そんなこんなでコンテストは終わつた。

ブツブツ…

不機嫌なのは光。

そして後ろから…

「光」！「

「あかり」…。

あかりは「ゴー！」。

それが光は氣に入らなくて。

「何？イヤミでもいいにきたの？」
「まさか。」

あかりは「ゴー」「ゴー」とバックから何かを取り出す。

「ハイ。これ。」

あかりが差し出したのは、優勝したパンだった。

「もう、仲直りしようよ。あたしはこのままはやだ。こんな関係、もう終わりにしよ？」
そりや、異母姉妹の仲は消えないけど、でも…友達としても、姉妹としても、これからやつていけるよ……」

光は何か不服そうだったが、

パンを一口。

パク

驚いた。

“私のパンより何百倍も美味しい。。。
これなら人参が嫌いな子供でも、気にせず人参を食べることができ
る。。。すごい。。。人参の味はしないのに。。。”

少し黙つていた。

「光？」

「私が負けた理由がわかった。すごいね。あかりは……。」

その後、2人は学校を卒業した。

2年後、1つの小さい、2人の店員と美味しくて見た目も綺麗なパンを作る噂のパン屋さんができるんだけど、それはまた別の話……。

そして、そのパン屋さんの名前は……

『焼きたて工房』

スニーカー

I
e
n
d

焼きたて工房（後書き）

中途半端な小説でしたが、楽しく読んでいただけたでしょうか。焼きたて工房はこれで終了です。読んでくれたみなさま、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6376c/>

焼きたて工房

2010年10月26日02時59分発行